

秋田市飯島穀丁出土の中世遺物について

庄内 昭男

ここに紹介する中世遺物は、昭和53年11月秋田市飯島穀丁において、上水道工事マンホール設置の際に発見されたものである(注)。飛砂が堆積した1.2m前後下層から出土したものであるが、発見後すぐにマンホールのコンクリートが打たれ、出土状況および出土層位の詳細については不明である。

発見地点の位置と環境

秋田市の中心地より国道7号線を北に8km進み、国鉄奥羽本線上飯島駅付近で秋田港へ通ずる県道を西に折れ、700m程入った南側の住宅地内に位置する。日本海へは直線距離で1.5kmである。標高10mの砂丘地ですぐ西側に水田が開け、水田面より2m前後高い。飯島付近に関連する中世の遺跡はみあたらない。北東に2km程離れて砂丘地の北側を流れる新城川のの上流には中世城館として飯岡館・岩城館があり、南に4km程離れて秋田城のすぐ北西に位置する秋田市寺内後城遺跡があり、そこからさらに南に3km程離れて秋田市川尻下夕野遺跡がある。後城遺跡・下夕野遺跡ともに集落遺跡と考えられている。

出土遺物について

遺物は2m×2mの方形の掘り方内から一括して出土した。発見者の話によると、掘り方のほぼ中央から口縁部を下にして伏せた播鉢とその中の茶臼が見つかり、周囲より二つ重なり、青磁碗と仏花瓶の付着した鉄釜が見つかったということである。

以下個々の遺物の詳細について説明したい。なお遺物の名称の前に付けた番号は、写真・実測図の番号と一致させた。

1. 青磁碗

完形品である。高さ6.6cm・口径13.8cm・台径6.4cmを測る。器形は高さ7mmの高台をもち、底辺部から



遺跡位置図

※国土地理院発行、5万分の1地形図「秋田」を使用した。

体部上半まで内弯気味に立ち上り、口縁部でわずかに外反する。器壁の厚さは底辺部で1.6cm、体部中位で6mmであり、口唇部は肥厚し、丸味をもつ。高台は貼り付けており、幅1.1cmである。釉色は淡緑色を呈し、高台内面で溜り、凸凹している。なお体部表面には太めの線刻で描かれた蓮弁が、内面中位には蓮子状の模様がみられる。

2. 青磁碗

発見時に口縁部がわずかに欠損したが、完形品である。高さ8.9cm・口径15.6cm・台径6.6cmを測る。器形は高さ1.2cmの高台をもち、底辺部から体部中位までは内弯気味に、体部中位から口縁部まではほぼ直線的に立ち上がり、深さがある。器壁の厚さは底辺部で1.5cm、体部中位で5mmであり、口唇部はやや薄くなる。高台は貼り付けており、幅7mmである。釉色は緑色を呈し、高台の内側だけが環状に露胎し、灰褐色を呈する。なお高台畳付は部分的に赭紅色を呈しており、体部に弱い貫入がみられる。

3. 仏花瓶

口縁部が欠損している。残存高15.5cm・底径6.4cmを測る。裾開きの台部に丸い胴部が上り、それに細長い口頸部が続き、口縁部は外反している。表面にはロクロ成形痕がみられ、台裏には糸切り痕が残る。素地は灰白色を呈しており、台裏を残して茶褐色の鉄釉がほどこされている。

4. 播鉢

口縁部が五分の一程欠損している。高さ17.5cm・口径41.6cm・底径14.8cmを測る。器形は底辺部よりほまっすぐに外傾し、口縁部でわずかに外反する。口縁部の一端は3.5cmの幅で1.5cm前後張り出し、片口となっている。表面にはロクロ成形痕がみられ、底部は切り離しの後にヘラ状工具によるナデ調整を行っている。底辺部から胴部下半には持ち上げる際に付いた指頭痕が残っている。内面の口縁端部は2.5cm幅で面取りしており、口唇部は先細りしているが、丸味をもつ。面取り部分には櫛歯波状文を施文しており、波長間隔は3.5cm前後で一定しているが、5条で結束する条の太さはまちまちである。面取り部分から2.5cm前後下がって、櫛歯状工具による卸し目を連続して密に引いている。櫛歯状工具による卸し目の幅は2cmで8条1単位となっており、条線は2mm前後の中太のものであ

る。この卸し目は体部下半からは使用のため磨滅している。なお色調は灰黒色を呈しており、胎土は粗く、白色の小石を多く含んでいる。

5. 茶白

完形品である。上白の直径は17.5cmを測る。上面にくぼみがあり、中央に直径2.2cmの円形の孔が貫通する。側面には相対するように、彫り起こしによる菱形の飾りを付けた挽き手孔が設けられている。挽き手孔は1辺1.7cmの角形を呈し、孔の深さは4cm前後である。下面の磨面は1mm前後の細い目を切り、1分画11～14溝で8分画している。下白は幅8.25cmの受皿部を含め、直径35.0cmを測る。上面の磨面は上白と同様な8分画に目を切っており、中心に1辺1.6cmの角形の芯棒取付孔があいている。下白上面は受皿縁部と同程度の高さで2cm前後の立ち上がりとなつている。下白の磨面がかすかに凸状、上白の磨面が凹状となり、磨面を合せた状態では中心から4cm程が「ふくみ」のためのすき間をつくり、同心円状に擦痕がめぐっている。かなりよく使用されたものであり、上白で1.5cm前後の高低差、下白で5mm前後の高低差があり、傾斜している。なお上白側面の菱形飾りには漆が付着し、上白の上面縁部、下白の受皿部にも漆が塗られていたようである。なお上白・下白側面は赤色を呈している。石材は安山岩で底面は凹み、粗い工具痕が残っている。

6. 砥石

長方体を呈し、四面を使用している。使用面は長さ21.5cm・幅4.0cmを測る。石質は凝灰岩で、色調は灰褐色を呈している。

7. 鉄釜

直径約24cmである。錆ついた外面に砂粒が付着し、形状は不明である。

遺物の年代と遺跡の性格について

青磁碗は舶載品であり、おおよそ明初期から中期にかけて製作されたものと考えられる。仏花瓶は瀬戸系、播鉢は珠州系のものと考えられる。陶磁器から推定される遺物の使用年代は、15世紀を中心とする室町時代前半頃である。出土状況についての十分な把握がされず、遺跡の性格についてはここでふれることはできない。しかし秋田県内では海岸部でしかも砂丘地という穀丁遺跡と同様な立地条件に中世陶磁器を出土する遺

秋田市飯島穀丁出土の中世遺物について

跡が数ヶ所知られている。秋田市寺内後城、男鹿市船越一向、能代市仁井田の各遺跡である。これらの遺跡との比較研究によって穀丁遺跡の性格もある程度推測できると考えられる。

参考文献

東京国立博物館編 『日本出土の中国陶磁』 1978

『世界陶磁全集3－日本中世－』 1977

『珠洲市史 第1巻資料編』 1976

小野正人 『北国－秋田山形－の陶磁』 1972

秋田市教育委員会 『後城遺跡』 1981

秋田市教育委員会 『下夕野遺跡』 1979

(注) 遺物は発見者の佐々木兼春氏より譲り受け、
現在当館で一括所蔵している。



◀遺跡遠景



遺物出土地点▶



1



2



3



4



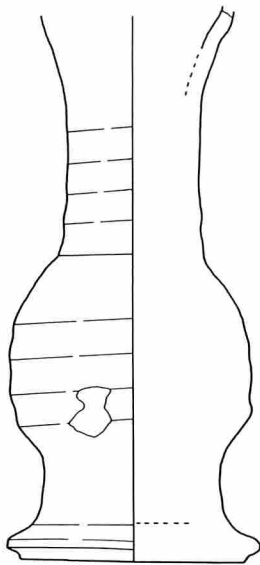
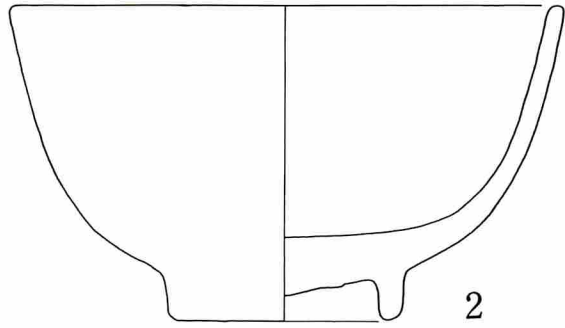
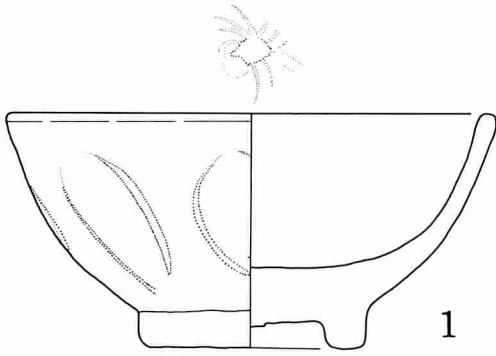
5

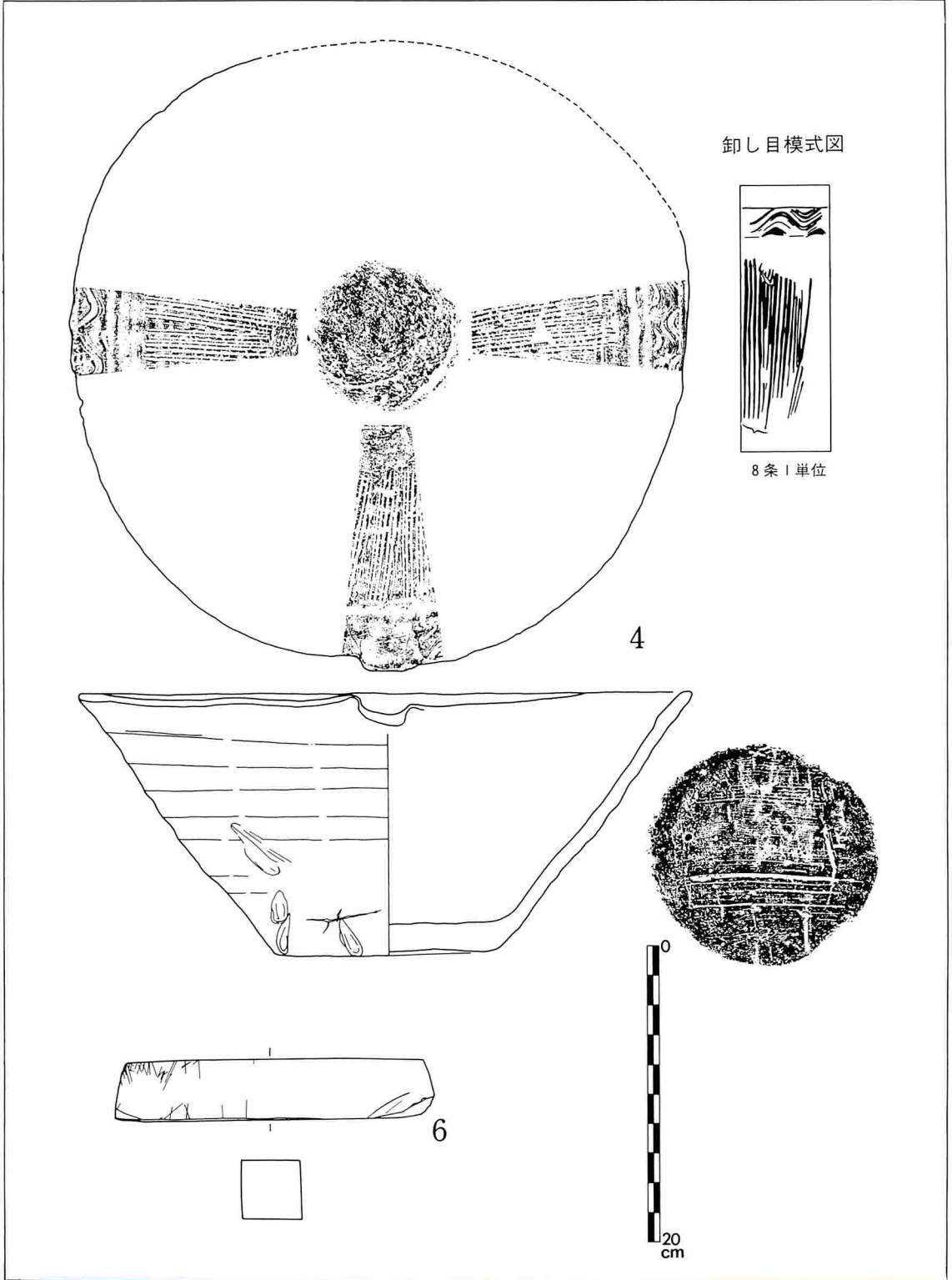


6

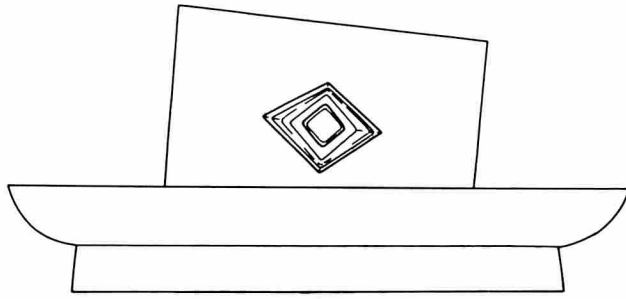


7

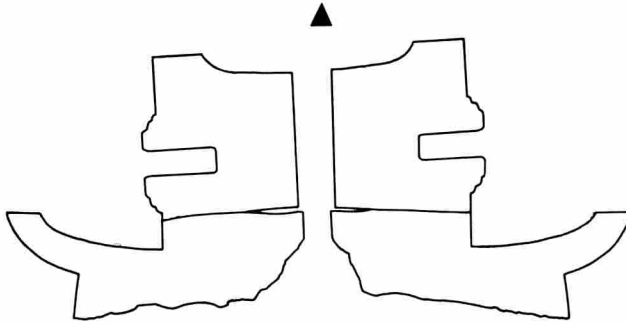




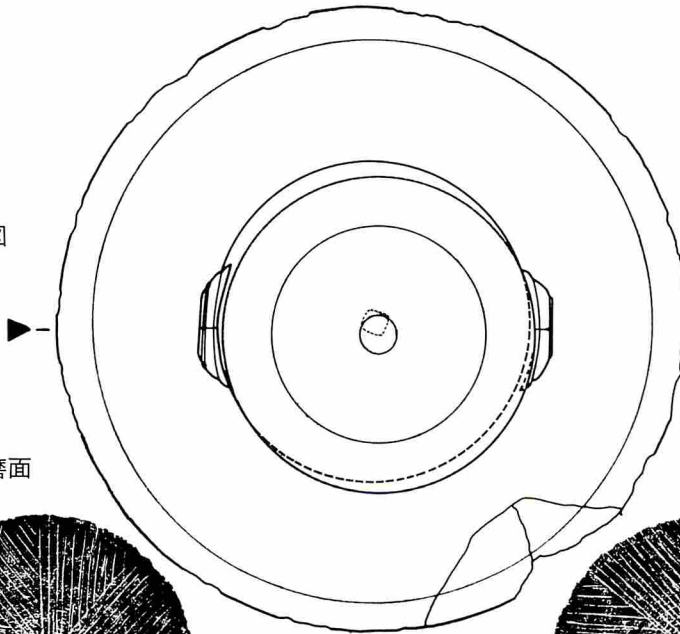
立面图



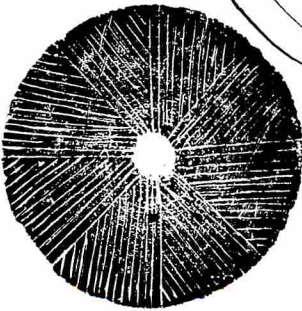
断面图



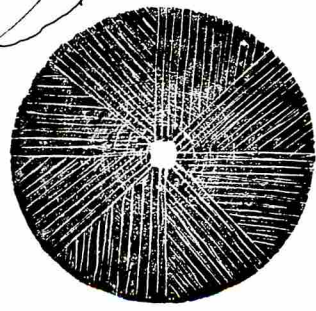
平面图



上白磨面



下白磨面



5